

6月総評

西駄かずよし

待ちぼうけのチケット売り場に腰
掛けてプラネタリウム始まってい
る

香取小春 宮崎県

だれかと一緒にプラネタリウムを見に行く約束をしていたのだろうか。既に始まってしまったプラネタリウムをよそに、チケット売り場で待ちつづける情景のみが淡々と描かれる（意識しない改行もそうした効果をねらったものなのだろうか。）。同じ作者の作品「たまごボーロを口で溶かして友達／が天使みたいに笑う夏の日」にも言えることであるが、描写という装置によって、読者は主人公の世界へ引き込まれる。

閉じ込めておいたんだ、
さなぎの中へ
光が朽ちぬように

こはくいろ 大阪府

光もまた朽ちることがあるのだろう。ただそれを朽ちないように蛹のなかに閉じ込めるという行為は、自身の成長を拒絶するかのようで、暗示的でもある。この作者のほかの作品「真っ白なページ、光って／崩れる／辣の文字」でも光という言葉が出てくるが、作者にとっての光は、希望のそれよりも、滅びと表裏一体のものようである。

秋の雨ごめんね汽車ぽっぽ来たね

藤田 ゆきまち 三重県

秋の雨と語り手は同じところに立っている。それは作者の次の作品「生きるって何って秋の螢って」においても同様で、自身の生と秋の螢はほとんど同義である。ごめんねのあとでリズムは切れて、汽車ぽっぽへと続く。ここではじめてホームでの別れのようだと気づく。

汽車は秋の雨をどこまで運んでいくのだろう。

ラベンダー畑の夜をボク、魚。

藤 雪陽 長野県

ここでのボクは、魚としてのボクで、夜を泳ぐボクでもある。ボクはきっと一面のラベンダー畑をどこまでも泳いでゆくのだろう。同じ作者の作品に、「ゆらゆらと十一月を象の鼻」「蜻蛉がベンチ譲ってくれなくて」というのがあるが、いずれも作者特有の語りが感じられる。

折り紙のような青葉にかこまれて
新築はさらさらさらと立ち

藤ほたる 神奈川県

新築がさらさらと立つという発想に惹かれる。比喩での表現は決して簡単ではないが、確固とした物語が作者のなかにあるからなのだろう。違和感なく読み手に伝わる。「潮風がくぼんで過ぎて痙攣の／ように木が揺れ るりいろのひる」についても同様で、この作者の持ち味でもある、透明でかわいた情景が広がる。

新学期の
自己紹介が
雨に
なって
降っている

立花ばとん 東京都

自己紹介が雨になって降るというシチュエーションに空白の時間を感じる。「新学期の」という一言で、それはよりリアルなものとなるが、ぽつぽつと切れる行替えが、そうした印象をより強くしている。

本当の自分を見つけられました

日曜午前にわたされる顔

加藤悠

愛知県

「本当の自分を見つけられました」と書かれたあとに、「日曜午前にわたされる顔」とつづく。それは反語のようでもある。まるで本当の自分はどこにもないかのような。

降ってくる夜を溶かした溜息に

温度計とか翳すふりする

Im

沖縄県

主人公は溜息に温度計を翳すのではなく「翳すふり」をする。それは測るという行為にそれほど意味がないことを分かっているからなのだろう。それでも翳すふりをするのは、その行為が慰めを含むからに違いない。

手の甲の皺を眺める老婆

その老婆が母だと知っている僕

まちりこ

埼玉県

一行目の最後に切れが入って視点が変わる。母を一人の老婆として見る視線から、その老婆が自身の母であったというように。この作品のおもしろいところは僕自身もまた他者として対象化されている点であろう。母を眺める僕と、その僕を見ている醒めた視線が作品全体を覆う。だから読者はその醒めた眼差しの理由について考えてしまうのである。

母からの電話に浮いている海月

ちはる

石川県

肉親からの電話には、何かアンビバレンツな感情がつきまとう。受話器の向こう側にたゆ

たう海月は、そうした諸々の感情をオブラートでやさしくつつむかのようである。少し作為かと思って佳作にはしなかったが、同じ作者の「定型を守ろうとして榆になる」という作品にも惹かれた。

息に

息にあたしは殺される

各駅停車が通過いたします

からすまあ 神奈川県

「息に」のルフランと、「あたしは殺される」という言葉の使い方から、多少生々しすぎる感じを受けるのだが、そのあとの「各駅停車が通過いたします」という無機質な一節で作品の印象が一変する。日常のなかにある危機意識を上手く捉えている。

明日世界が終わる気がして

カップラーメンにお湯を注いだ

小沢旭 山梨県

確かアウシュヴィッツを書いたプリーモレーヴィの著作の一節に、明日死ぬと判っていても母親は赤ん坊に乳を飲ませるに違いないという記述があったように思うが、ここでのニュアンスは逆である。世界の終末を想起することで、はじめてカップラーメンにお湯を注ぐという理由を得る。ここにある生の実感の希薄さは、世界の終りを想起しなければ、食べるということの理由すら得ることができないようなものである。

赤ちゃんの口から夏の風ふわり

宮本 浩 大阪府

風は気圧の高い方から低い方へと吹くということは分かっていたとしても、その出自については誰も知らない。赤ちゃんの口からふわりと吹く夏の風に、やしさとなつかしさを感じるのは、僕たちが風の生まれた場所を見つけたように感じるからかもしれない。

白Tとジーンズでいいや夏の日

早川 のり 愛知県

一読、そうそうという共感が湧く。それは「いいや」のあとにできる余白の影響によるものだろう。それによって夏の日が実体化され、けだるい感じやむせかえるような暑さが想起される。

夜側の足を浮かせて
少しだけ
お昼を長くするフラミンゴ

永山 逢海 神奈川県

ここでのフラミンゴは世界を統べているかのようである。しかし「少しだけ」とことわりを入れるのはフラミンゴが万能ではないからで、だからこのフラミンゴは自分自身かもしれないと思えるのである。

梅雨時の
霧雨の中の

逃避

長谷川柊香 宮城県

『霧雨の中の』の後の一行空きが効果的。『霧雨の中の//逃避』と書かれることで逃避そのものが具象化される。雨の中に書き手の息遣いだけがあるかのような錯覚を覚える。